

天竺

T1A3  
26E96  
(KA19)



明治十九年九月十六日  
小學校歷史科用  
文部省檢定済

鹿兒島縣私立教育會編輯

# 鹿兒島縣史談

吉田文典發兌

## 鹿兒島縣史談例言

- 一 本書ハ本縣教則第九條ノ旨趣ニ基ツキ高等小學校歴史科用ニ充ツルノ目的ヲ以テ編纂シタルモノナリ
- 一 歴史上ノ事實ハ之ヲ學ビテ語記センコト極メテ難事タリ故ニ本書ノ文章ハ平易簡明ヲ主トシ且難易ノ程度分量ノ多少ノ如キハ兒童心カノ發達ニ適合セシメタレドモ尚ホ繪畫圖表ノ補助ニ依リテ快樂中ニ其事實ヲ知了セシメンコトヲ要ス
- 一 本書教授ノ分量ハ一時間凡ソ一教ノ割合ナリ
- 一 本書ノ卷末ニハ嶋津氏承繼表ヲ附セリ是レ即チ兒童ニ年代ノ關係ヲ知ラシメンガ爲メナリ

鹿兒島縣史談

二十五年版

鹿兒島縣史談

目次

- 第一 我方鹿兒島縣
- 第二 鶴嶺神社
- 第三 松原神社
- 第四 日新公
- 第五 新納忠元
- 第六 島津義弘公
- 第七 薩摩燒
- 第八 琉球征伐
- 第九 照國神社
- 第十 島津久光公

- 一 丁
- 二 丁
- 三 丁
- 四 丁
- 五 丁
- 六 丁
- 六 丁
- 七 丁
- 八 丁
- 九 丁

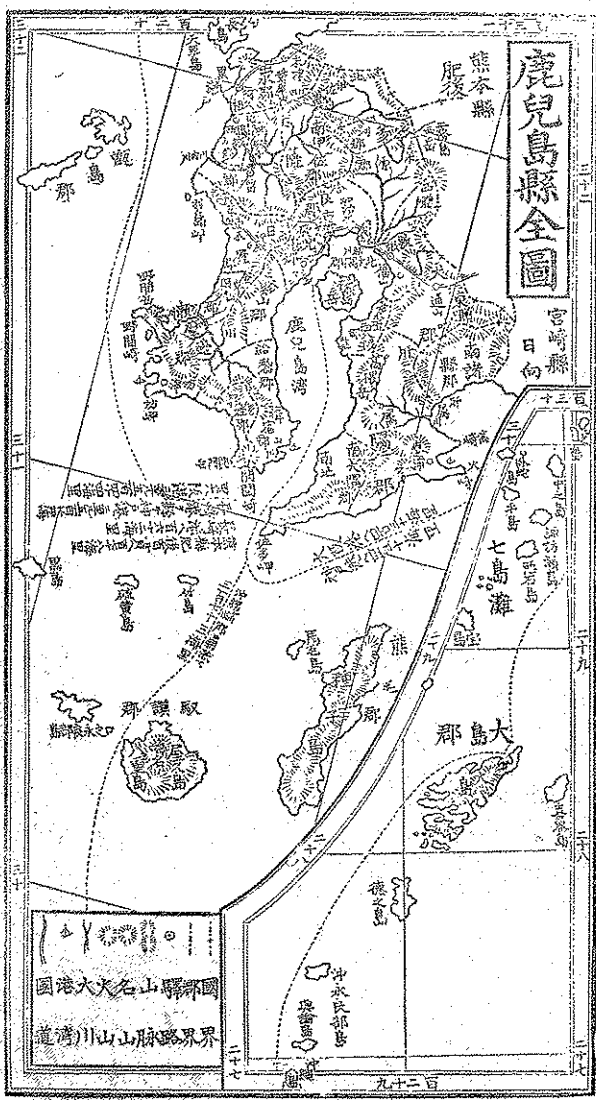
第十一	英艦ノ未寇	十一丁
第十二	鐵砲	十二丁
第十三	西郷隆盛大久保利通	十三丁
第十四	月照	十四丁
第十五	桂庵ノ墓	十五丁
第十六	調所廣郷	十六丁
第十七	可愛山陵 高屋山陵 吾平山陵	十七丁
第十八	甘藷及煙草	十八丁
第十九	我が縣沿革ノ大要	二十丁

鹿兒島縣史談目次終

鹿兒島縣史談

第一 我が鹿兒島縣

我レ等が住メル、鹿兒島縣ハ、日本帝國ノ、西南部



ニアル、九州ノ西南ノ端トソノ西南ニ並ビタル嶋

々ニシテ、即、薩摩、大隅ノ二ヶ國ト、日向國ノ南諸縣郡コレナリ。

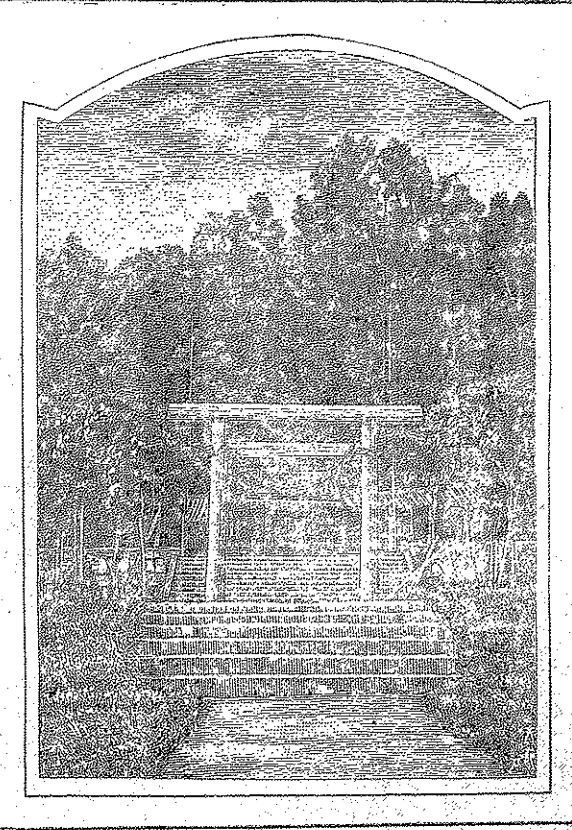
今上天皇陛下ノ御祖先ニ當ラセ玉フ、神武天皇ノ初、居タマヒシ所ハ、現今我が縣ニ隣ル宮崎縣、即、日向國ナリ。然レ氏、昔ハ、我が縣ト別ニ區別シタルヲナク、薩摩、日ノ三州ハ、熊襲、又ハ、隼人國ト云ヒ、此所ニ住ムモノヲ隼人ト云ヘリ。殊ニソノ頃ハ、熊襲梟帥ト云ヘル、勇マシキ人モ住ミタリ。ソレヨリ凡一千一百年程ヲ經テ、嶋津家ノ領地トナレリ。

此ノ三州ハ、從來他州トノ交通不便ナリシガ、其ノ習俗ニハ、一種貴ブ可キ、質朴ト剛直トノ風ヲ存セリ。蓋明治ノ元勲ヲ出セシモ、亦此ノ風紀ノ存セシニヨリシナラン。

第二 鶴嶺神社

鶴嶺神社ハ、島津氏ノ祖先ヲ合セ祀レル所ニシテ、鹿兒島市、城山ノ麓ニアリ。其ノ高祖ヲ忠久公ト云フ。

忠久公ハ、征夷大將軍、源賴朝公ノ子ニシテ、攝津國、住吉ニテ生マル。母ハ、即、丹後局ナリ。賴朝公、公



二島津ノ姓ヲ賜ヒ、薩隅、日三州ノ守護トナス。公ノ始メテ、鎌倉ヲ發シ、國ニ就クヤ、薩摩國ノ木牟禮城ニ居レリ。城ハ出水郡ニアリテ、今ノ屋地ト稱スル所ナリ。

コノ時、薩隅、日三州ノ中ニハ、肝屬氏、蒲生氏等ノ豪族、所々ニ據リテ、從ハザルモノ多カリキ。コレ

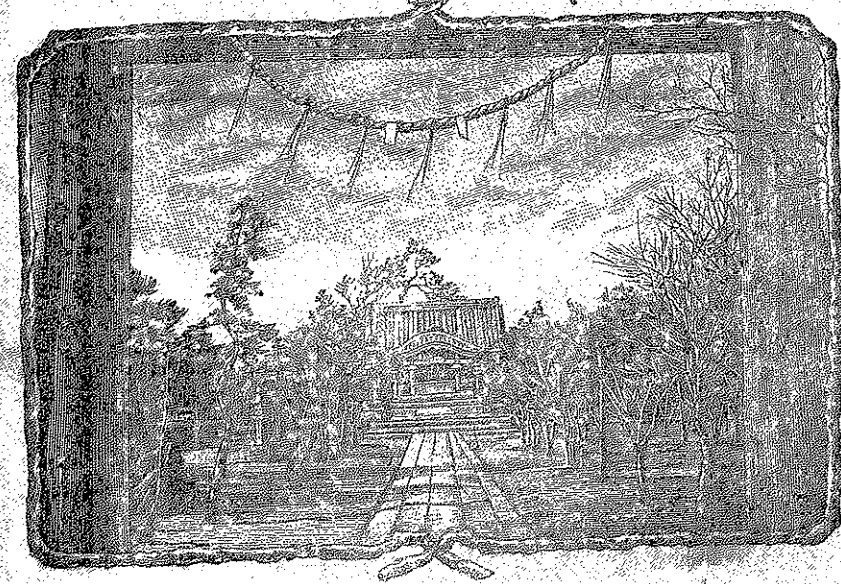
今ヲ距ルコト、七百餘年前ノ事ナリ。ソレヨリ、子孫連綿トシテ漸盛ニ、從ハザルモノヲ伐チ平ゲテ、永クソノ職ヲ傳ヘタリ。今ノ島津忠義公ハ、即第二十九代ニ當ラル。

第三 松原神社

松原神社ハ、鹿兒島市ニアリテ、島津貴久公ヲ祀レル所ナリ。貴久公ハ、忠良公ノ子、義久、義弘二公ノ父ニシテ、大中公コレナリ。

忠久公ヨリ、十四代ヲ勝久公ト云フ。コノ時、國內頗亂レケレバ、勝久公、政務ヲ日新公ニ托シ、ソノ

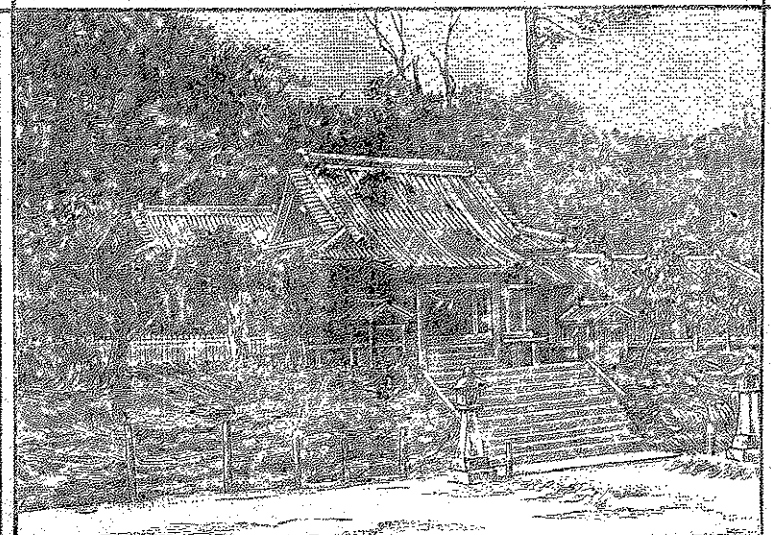
子虎壽丸ヲ養ヒテ、嗣ト  
ナス、虎壽丸ハ、即、貴久公  
ナリ。  
貴久公、英邁勇武ニシテ、  
能ク兵ヲ用ヒ、外ハ、菱  
刈氏、相良氏、澁谷氏等  
ノ豪族ヲ降シ、内ハ、大ニ  
國政ヲ治ム。コレヨリ島  
津氏ノ威勢、甚、強大ヲ致  
セリ。



コノ時ニハ、義久公、義弘公ノ如キ、父ニ劣ラザル  
英將ヲ始トシテ、新納武藏守忠元等ノ豪傑アリ  
キ。

第四 日新公

日新公ハ、島津貴久公ノ父ニシテ、島津忠良公ト  
云ヘリ。公、英邁仁慈ニシテ、賢ヲ尊ビ、能ヲ愛シ、智  
仁勇兼備ノ良將ナリキ。勝久公ノ時ヨリ、國人ノ  
服セザルモノ多ク、國內大ニ亂レケレバ、日新公、  
コレヲ討平ゲテ、國內ヲ一定セラレキ。  
日新公、コノ戦亂ノ世ニアリテ、學ヲ好ミ、徳ヲ修

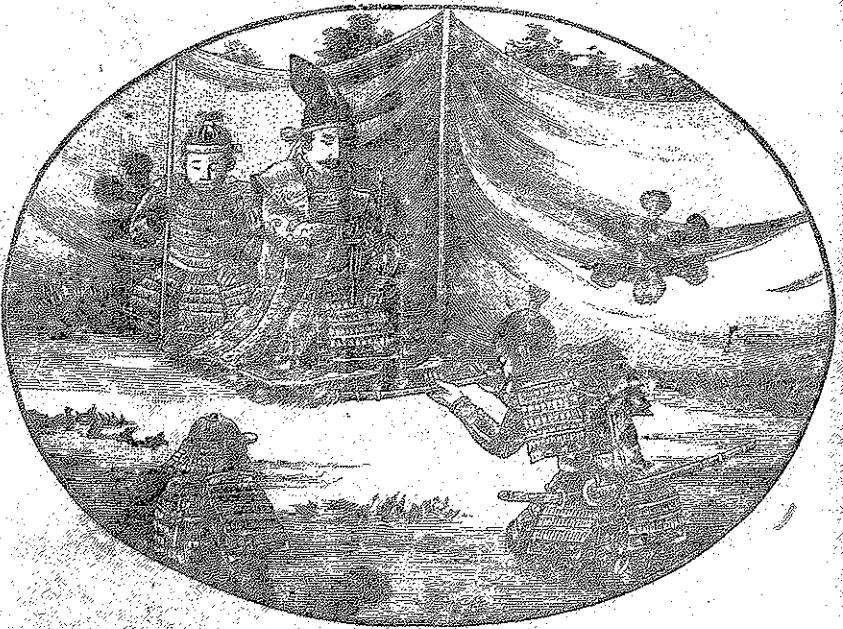


メ、貴久公ヲ補翼シテ、島津氏中興ノ業ヲ成就シ、又、和歌ヲ善クシテ、訓ヲ後世ニ垂レラレタリ。ソノいろは歌ハ、皆、道義ヲ萬世ニ繋グ所ニシテ、吾人ノ常ニ敬誦スル所ナリ。公、卒セラル、ニ及ビ、川邊郡ノ加世田ニ葬リ、又、ソノ神靈ヲ、ソノ處ニ

祀レリ。武田神社コレナリ。

第五 新納忠元

新納武藏守忠元ハ、貴久ト、義久ト、義弘トニ歴任シテ、屢、武功ヲ顯ハセリ、義久公ノ時、大口城主タリ。太閤秀吉、親、兵二十萬ヲ率井テ、島津氏ヲ討ツニ當リ、祢答院領主、島津



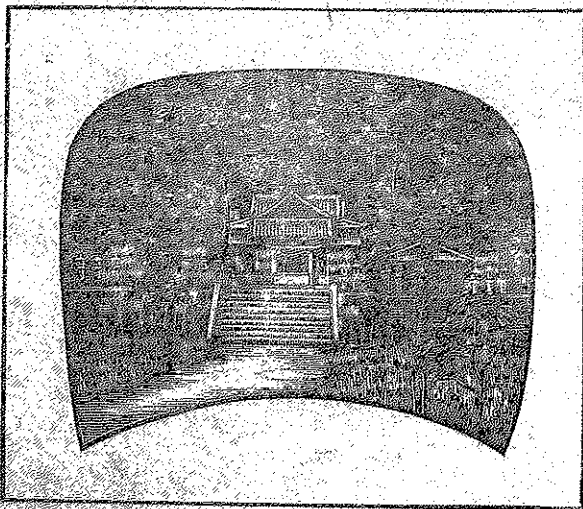


歳久ト謀ヲ合セ、武備ヲ嚴ニシテ、東軍ヲ要セリ。會、義久公、兵敗レテ降ヲ納ル。然レドモ忠元、猶固ク守リテ曰ク、「太閤、大兵ヲ以テ、我が境ニ入ル、一人ノ敵スルモノナクンバ、天下ノ人ハ、必、薩、隅、日ノ三州中、一人ノ男子ナシト謂ハシト。」義久公、切ニコレヲ論シテ曰ク、「我レ今思フ所アリテ、和ヲ約シ、質ヲ出セリ。子、國ニ忠ナラント欲セバ、枉ゲテ我が言ニ從ヘ、猶、從ハズンバ、子ハ、即、我が敵ナリト。」是ニ於テ忠元、髮ヲ剃リ、出デ、天堂尾（菱刈郡曾木）ノ陣營ニ至リテ降レリ。

忠元ハ、武勇ニ長シタルノミナラズ。又、詩歌ヲ善クセリ。嘗、義弘公ノ征韓ヲ送ルトテ、  
あぢきなや、唐土までも、おくれどど、思ひしことも、昔なりけり。ト咏セラレキ。此ノ他、尚、人ノ知ル所多シ。

第六 島津義弘公

島津義弘公ハ、義久公ノ第二子テ、即、維新公ナリ。武勇絶倫ニシテ、父兄ト共ニ、國亂ヲ定メ、武威ヲ九州ニ輝



カセリ。

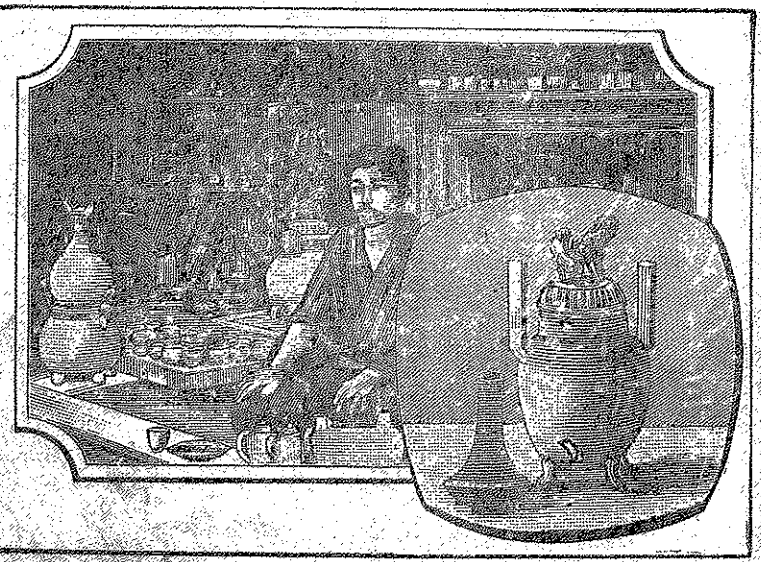
大閣秀吉、天下ヲ一統スルニ及ビ、大舉シテ、朝鮮  
ヲ伐ツ。義弘公亦、兵ヲ發シテ、朝鮮ニ航シ、外ニ在  
ルコト、前後七年、新寨、泗川ノ役、武功尤、多シ。後、慶  
長五年、關ヶ原ノ役、徳川氏ノ兵ト戦ヒ、敗レテ國  
ニ歸ラル。

公、薨シテ後、神靈ヲ日置郡ノ伊集院ニ祀ル。徳重  
神社コレナリ。

第七 薩摩燒

義弘公朝鮮ヨリ歸ラル、ニ當リ、嘗、我が軍ニ質

タル所ノ男女、十七姓、四  
十餘人ヲ携へ來リ、鹿兒  
島ノ高麗町ニ居ラシム。  
後、慶長八年、日置郡ノ苗  
代川ニ移シ、耕作ノ地ヲ  
與へテ、業ニ就カシメ、猶  
父祖ノ姓氏ヲ稱シテ、容  
貌、衣服等、皆、舊制ニ從ハ  
シメタリ。



ソノ人々、朝鮮風ノ陶器ヲ製セシガ。中ニ朴興用

ト云フモノアリ。始メテ、苗代川ニ於テ、製造所ヲ開ク。コレ苗代川陶器製造所ノ始ナリ。後、大隅國ノ帖佐、鹿兒島ノ立野ニモ製造所ヲ設ケシガ。終ニ磯ノ田之浦ニ移セリ。今ノ田之浦陶器製造所コレナリ。

ソノ製造スル陶器ハ、昔ハ、甚、質素ノモノナリシガ、今ハ、大ニ精巧ヲ極メ、手ガ縣ノ名産トナレリ。

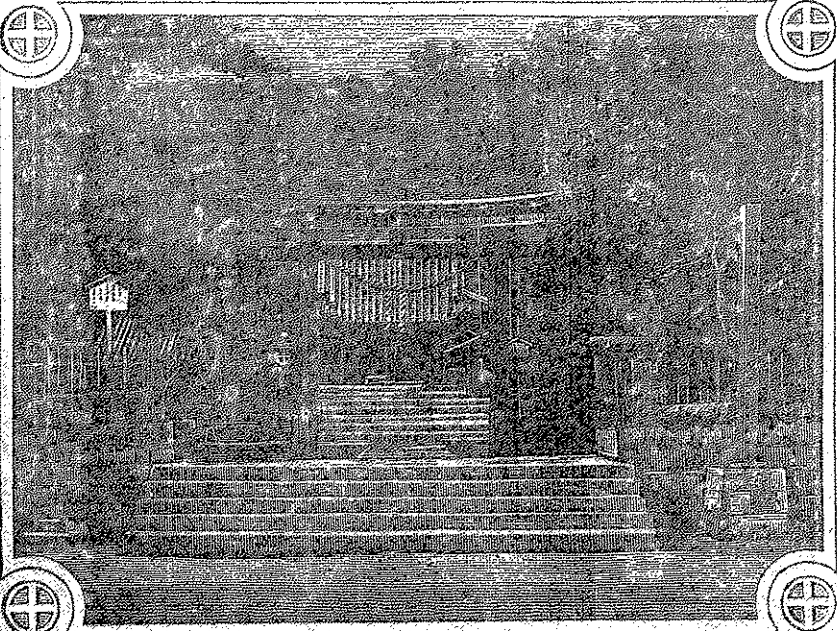
#### 第八 琉球征伐

琉球ハ、室町時代ヨリ島津氏ニ屬セシガ、其後、久シク、貢獻ヲ怠レルヲ以テ、島津家久公、屢、使ヲ以

テ之ヲ責メ給ヘドモ、敢テ從ハズ。此ニ於テ將軍徳川家康ニ請ヒ、樺山久高ヲ大將トナシ、之ヲ征伐シ給フ。久高等、山川港ヨリ兵艦ニ乗り、進ミテ大島、徳之島ヲ平定シ、直ニ琉球ニ攻メ入り、王城ヲ圍ム。中山王大ニ恐レ、出テ降レリ。之ヨリ貢ヲ入レテ、島津氏ニ屬シ、以テ明治初年ニ至ル。實ニ慶長十四年、今ヲ去ルコト、二百九十餘年前ナリ。

#### 第九 照國神社

照國神社ハ、鹿兒島市ニアリ。贈從一位島津齊彬公ヲ祀レリ。公ハ、齊興公ノ子ニシテ、忠義公



ノ義父タリ。  
齊彬公、天資聰明ニシテ、  
夙ニ内外ノ事情ヲ洞察  
シ、學ヲ好ミ、賢ヲ用ヒ、文  
ヲ勵マシ、武ヲ勸メ、産業  
ヲ興シ、常平倉ヲ淑ム。常  
ニ我が邦人ノ、外國ノ事  
情ニ通ゼザルヲ憂ヒ、博  
ク西洋ノ學藝ニ通達シ  
タルモノヲシテ、航海、造

船、鑄砲、用兵等ノ諸書ヲ譯セシメ、又、荷蘭人ヲ聘  
シテ、砲臺ヲ築キ、又、造船所ヲ櫻嶋ニ開キテ、軍艦  
ヲ造ル。コレ實ニ我が邦ニテ、西洋形軍艦ヲ造ル  
ノ嚆矢ナリ。又、集成館ヲ設ケテ、銃砲ヲ鑄造シ、荷  
國ノ文明強盛ヲ資クル所ノモノハ、普クコレヲ  
採用セラレタリ。中ニモ造士館、演武館ノ制規ヲ  
釐革シ、大ニ文武ノ士ヲ養ハレシガ如キハ、實ニ  
公ノ明、千載ニ赫々タルヲ知ル可キナリ。  
嘉永六年、亞米利加、合衆國ノ使節、始メテ我が邦  
ニ來ルヤ、公、深クコレヲ憂ヒ、屢、書ヲ朝廷ニ上リ

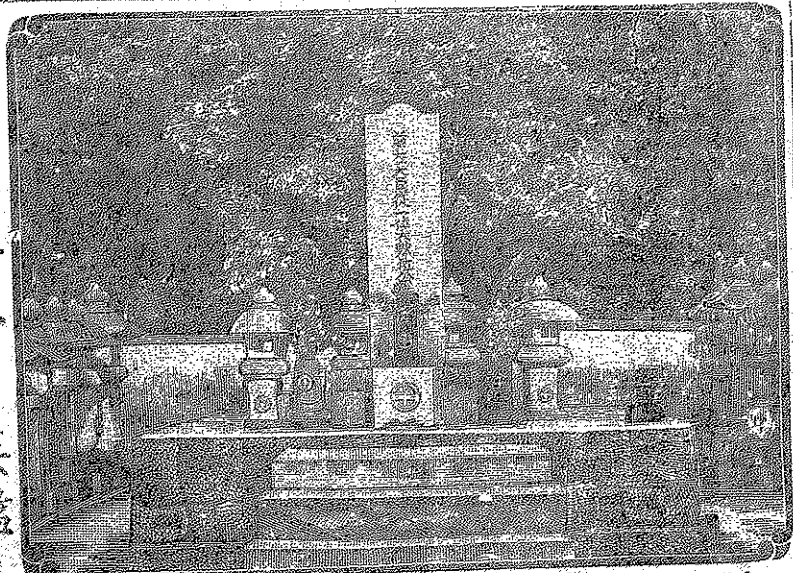
テ、忠誠ヲ表シ、策ヲ幕府ニ獻シテ、大計ヲ陳ブ。維新ノ時、薩摩人士ガ、功業ヲ奏セシハ、實ニ公ノ德澤ニ由レルモノト云フベシ。薨ズルノ後、朝廷ソノ功ヲ追賞シ、勅シテ、權中納言從三位ヲ贈リ、照國ノ神號ヲ賜フ。今上天皇、亦從一位ヲ贈リ、別格官幣社ニ列シ給フ。

第十 島津久光公

積年勤王之稱首と爲り、大兵を舉げ、斷然力を朝廷に盡し、戊辰之春、伏見之一戰、大に賊膽を破り、天下人心の方向を決し、續て東北諸道

出兵し、每戰取捷、竟に平定の偉功を奏し、奉安宸襟候段、洵に國家の柱石に被思召、獻感不斜、仍而爲其賞、官位昇進、祿拾萬石下賜候事。

トハ、明治二年六月、我が今上天皇ノ、島津久光公ト、島津忠義公トニ、下シ賜ヒシ所ノ勅語ナリ。久光公ハ、齊彬公ノ弟ニシテ、忠義公ノ實父ナリ。公、博ク和漢ノ學ニ達シ、夙ニ尊王ノ志ヲ抱キ、齊彬公ノ遺志ヲ繼ギ、大ニ國事ニ盡サル、所アリキ。維新ノ初、左大臣ニ任シ、從二位ニ叙セラル。幾クモナクシテ致仕シ、鹿兒島ニ歸ラレタリ。後、明

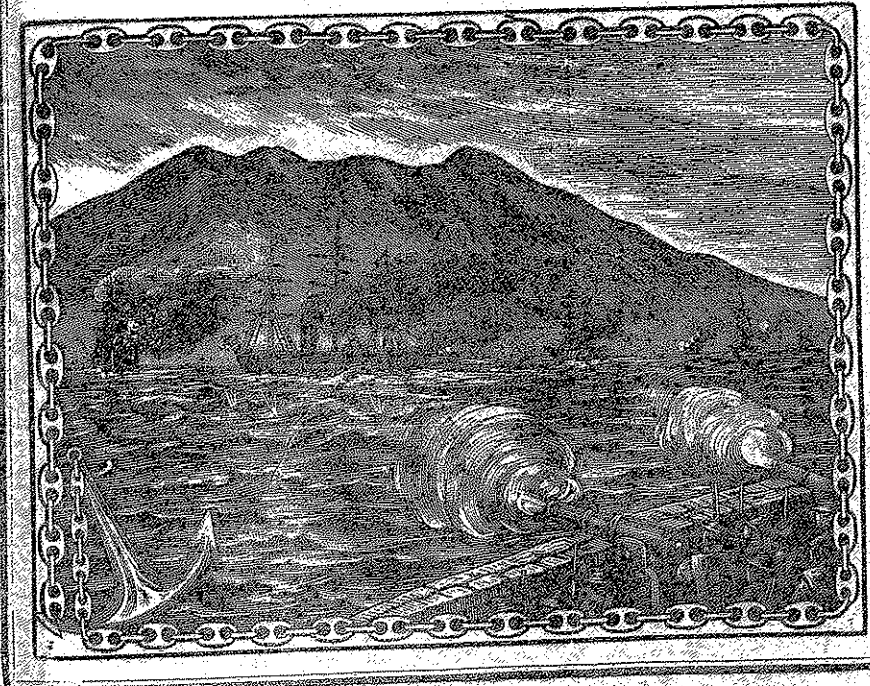


第十一 英艦ノ來寇

治二十年、鹿兒島ニ薨セラ  
ル。公ノ疾篤キニ及ビ、  
今上天皇、侍醫ヲ遣シテ、之  
ヲ視セシメ、且、大勲位ニ叙  
セラレ、菊花大綬章ヲ賜ハ  
ル。其薨ゼラル、ニ當リ、勅  
シテ、三日間ノ朝ヲ廢シ、國  
葬ノ禮ヲ以テ、鹿兒嶋市、福  
昌寺ニ葬リ給ヘリ。

文久三年六月、英吉利國ノ軍艦、七艘、鹿兒島港ニ  
寇ス。初、朝廷、勅使ヲ幕府ニ遣ハシ、島津久光公ヲ  
シテ共ニ行カシム。歸ルニ及ビ、公、先發シテ、生麥  
村武藏ニ至ル。英人三名、馬ヲ馳セテ、ソノ行列ヲ  
侵ス。從士一人ヲ殺シ、二人ヲ傷ク。英人大ニ怒リ、  
幕府ニ逼リテ、償金三十萬元ヲ得。更ニ、鹿兒嶋港  
ニ來リテ、三萬元ヲ島津氏ニ要求ス。島津氏應  
ゼズ。藩兵、嘗、齊彬公ガ築ク所ノ、天保山、祇園洲、  
櫻嶋等ノ砲臺ニ據リテ、コレヲ守ル。英艦、終ニ  
漁船三艘ヲ奪ヘリ。會、風雨大ニ至ル。藩兵コレ

ニ乗ジテ砲撃ス。英艦狼  
狽シ、或ハ錨ヲ捨テ、去  
ルモノアリ。此ノ後、英艦  
ノ我が砲臺ヲ狙撃セシ  
モノ、往々市街ヲ焼キ、ソ  
ノ兵火ニ罹リシ所、少十  
カラズ。集成館、亦、烏有ニ  
歸セリ。コレ今明治二十  
九年ヲ距ルコト、三十四  
年ノ前ニアリ。事、獻聞ニ



達シケレバ褒勅ヲ賜ハリタリ。後、戦ノ無益ナル  
ヲ以テ、金ヲ與ヘテ、コレト和セリ。

第十二 鐵砲

鐵砲ハ、今ヲ距ルコト、三百六十年前、後 天 皇 長 十 二 年  
ぼるちゆがる國ノ人、我が國ニ來リテ、コレヲ傳  
フ。聞ク當年八月、大隅國、種子島ニ錨ヲ下ス。大  
船アリ。何國ヨリ來ルヲ知ラズ。船客百餘人、容貌  
異ナリテ、言語通ゼズ。ソノ中ニ、一ノ支那人アリ  
シカバ、島主、種子嶋時堯、一僧ヲシテ、コレト筆話  
セシム。支那人曰ク、コレハ南蠻ノ商人ナリト、ソ

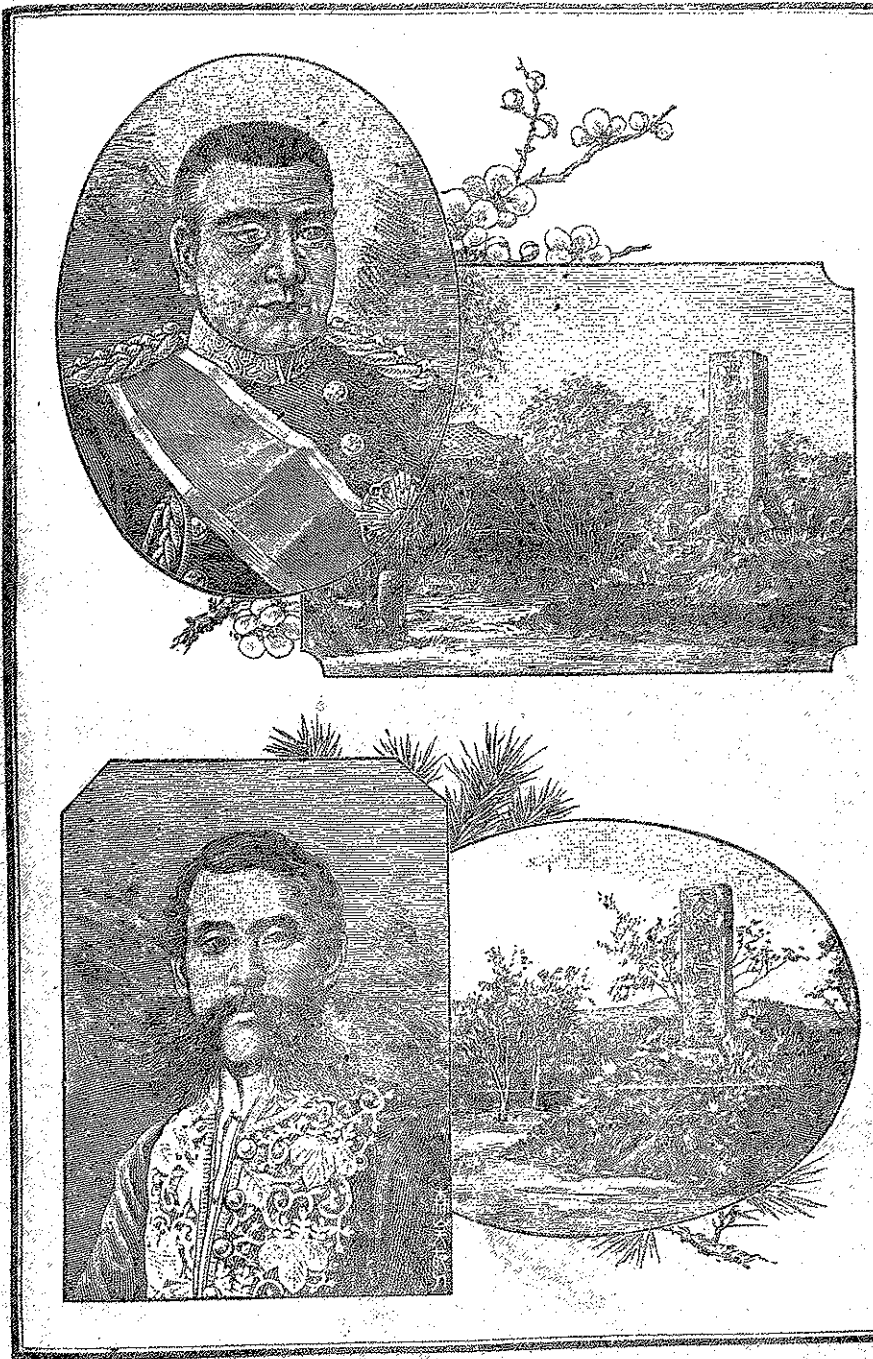
ノ頃、ぼるち、ゆがる等ノ人ヲ、南蠻人ト云ヘリ。  
船中ノ人、鐵砲ヲ取り、コレヲ放ツニ、火光、電ノ如ク、響、雷ノ如シ。見ルモノ、驚キテ神トナス。時、堯、厚ク遇シテ、コレヲ學ビ、鐵砲ニ挺ヲ得。篠川小四郎時重ヲシテ、火藥調合ノ法ヲ學バシメ、劍工八板金兵衛清定ヲシテ、鐵砲鑄造ノ法ヲ學バシム。ソノ人、秘シテ教ヘズ、清定漸クニシテ、コレヲ學ビ、辛苦丹精シテ、遂ニ鐵砲一挺ヲ造リタリ。形似タリト雖、ソノ底ヲ塞グ法ヲ知ラザリキ。翌年ソノ船、又、種子島ニ來ルヤ、時、堯大ニ喜ビ、清定ヲシテ、

底ヲ塞グ法ヲ學バシム。歳餘ニシテ、鐵砲數十挺ヲ造ルコトヲ得タリ。事、天聽ニ達ス。朝廷、時堯ヲ賞シテ、位階ヲ進メラル。コレ我が邦ニテ鐵砲ヲ造ルノ始ナリ。

第十三 西郷隆盛、大久保利通

今ノ鹿兒嶋市、加治屋町ニ遊ブ人ハ、必、コレヲ見ルナラン、ソノ稍、甲突川ニ近キノ地ニ、二個ノ小公園ノ如キモノアリ。石碑高ク中央ニ立ち、櫻梅桃李、ソノ四周ニ並植シタルヲ。コレ一ハ西郷隆盛、誕生地ノ紀念碑ニシテ、一ハ大久保利通、誕生



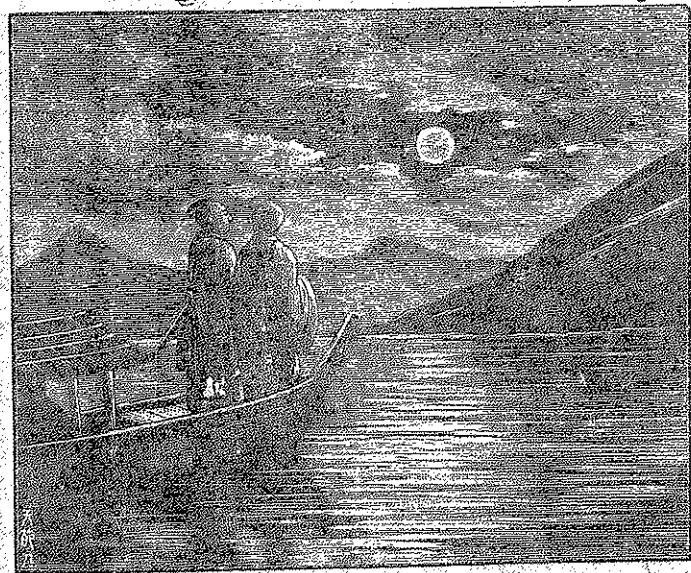


地ノ紀念碑ナリ。維新ノ際、共ニ王事ニ勤メテ、大ニ功勞アリシ人ニテ、隆盛ハ、陸軍大將兼參議ニ任ゼラレ、利通ハ、參議ニ任ゼラレ、後、内務卿ニ任ゼラレタリ。隆盛ハ王政復古ノ元勳ニシテ、利通ハ、王政維新ノ大業ヲ翼賛シ、内外多事ノ政府ニ立チテ、廣ク皇威ヲ遠邇ニ施ケリ。コノ紀念碑ノ下ニ遊ブモノ、誰カコノ二人ノ功勳ヲ欽慕セザラン。

第十四 月照

月照ハ、京都清水寺ノ僧ナリ。人ト爲リ、温厚忠誠

ニシテ、志氣雄堅ナリ。常ニ皇威ノ式微ヲ慨キ、大ニ幕府ノ專横ヲ憤リ、夙ニ勤王ノ說ヲ唱フ。西郷隆盛亦、京都ニアリ。共ニ邦家皇室ノ爲ニ、計畫スル所多カリキ。會、幕府、令ヲ下シテ、勤王ノ志士ヲ捕フルコトアリ。月照亦、ソノ追捕ノ甚急ナルヲ以テ、隆盛ニ倚リテ、逃レテ、薩摩ニ匿ル。

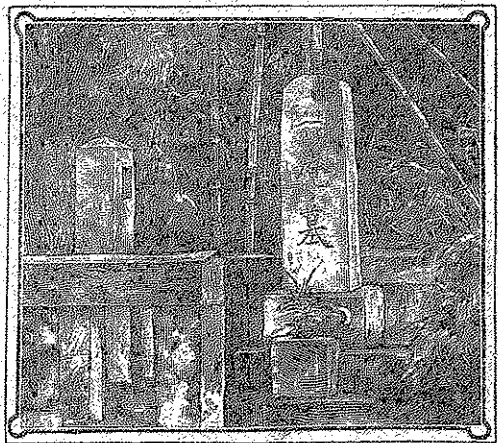


然レドモ、終ニ免ルベカラザルヲ慮リ、隆盛ト共ニ舟ニ乗ジテ、日向ニ赴カントス。隆盛曰ク、幕吏ノ追跡、甚密ニシテ到底免ルベカラズ、乞フ、共ニ死ニ就カント。是ニ於テ二人相約シテ、海ニ投ズ。舟人驚キテ、コレヲ救ヘドモ、月照ハ既ニ死シテ、復蘇セザリキト云フ。時ニ安政五年ニシテ、月照齡、四十六歳ナリキ。鹿兒島市、南林寺墓地ニ葬レリ。

第十五 桂庵ノ墓

桂庵ノ墓ハ、鹿兒島郡、伊敷村ニアリ。桂庵ハ、周防

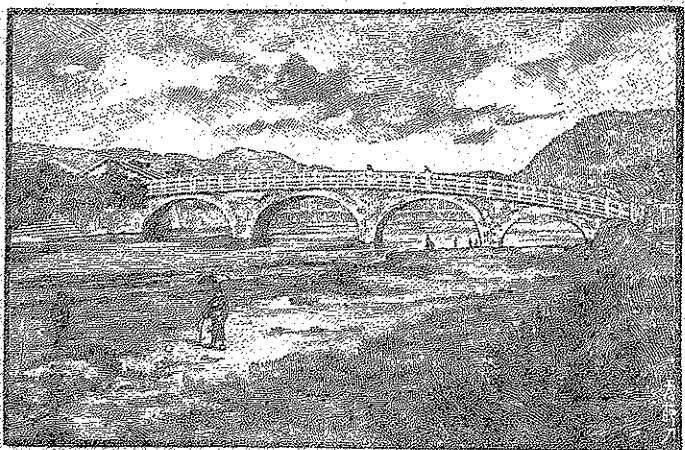
國、山口ノ人ナリ。幼時、京都ニ出  
 テ、僧トナレリ。嘗、後土御門  
 天皇ノ勅ヲ奉ジテ、明國ニ使シ、  
 居ルコト、七年、程朱ノ學ヲ攻ム。  
 歸リテ後、島津忠昌公、コレヲ聘  
 シテ、鹿兒島ニ居ラシム。桂庵、程  
 朱ノ說ヲ唱へ、國老、伊地知重貞ト議リ、始メテ大  
 學章句ヲ刊行ス。從ヒ學ブモノ甚、多ク、月渚、最顯  
 ハル、而シテ月渚、コレヲ一翁ニ傳へ、一翁、コレヲ  
 文之ニ傳へ、文之、コレヲ如竹ニ傳へ、漸ク廣ク世



ニ行ハル、ニ至レリト云フ。桂庵、老イテ、伊敷村  
 ニ隱居ス。死シテ後、ソノ地ニ葬ル。實ニ我が邦ニ  
 於ケル程朱學ノ祖ナリ。

第十六 調所廣郷

調所廣郷ハ、通稱ヲ笑左衛門ト  
 云フ。幼ニシテ、島津重豪公ノ茶  
 道坊主トナリ、齊宣、齊興ノ二公  
 ニ仕へ、終ニ國老トナリテ、藩政  
 ヲ經營改革セシ所、甚、多シ。廣郷、  
 人ト爲リ、志氣豪邁、節儉勤勉ニ



シテ百難屈セザルノ氣慨アリ。重豪公ノ時ヨリ、  
 國用連ニ加ハリ財政甚、困難ナルニ至レリ。コノ  
 時ニ當リ、廣郷、財政整理ノ命ヲ奉ジ、拮据勤勉、附  
 托ノ命ヲ全ウセシコトヲ期シ、農ヲ勵マシ、商ヲ  
 勸メ、河水ヲ治メ、橋梁ヲ架シ、道路ヲ開キ、終ニ衰  
 弊シタル國庫ヲ充タシ、財政ヲシテ、大ニ豐ナル  
 ニ至ラシメタリ。甲突川五大石橋ノ築造モ、亦、君  
 ガ經營セシ所タリ。  
 是ニ於テ殖産、教育、兵制等、皆、ソノ基礎ヲ鞏固ニ  
 スルコトヲ得、國運駸々トシテ、士民ソノ業ニ安

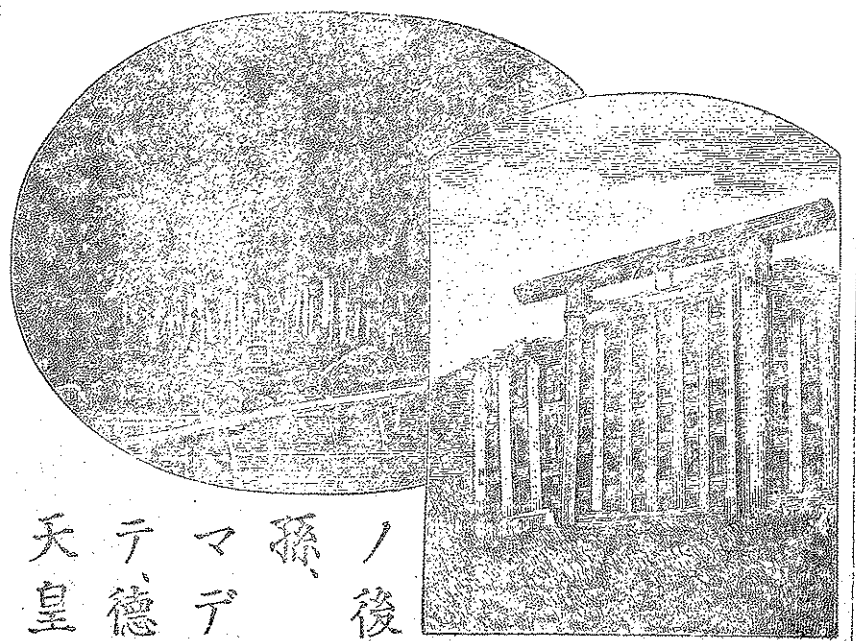
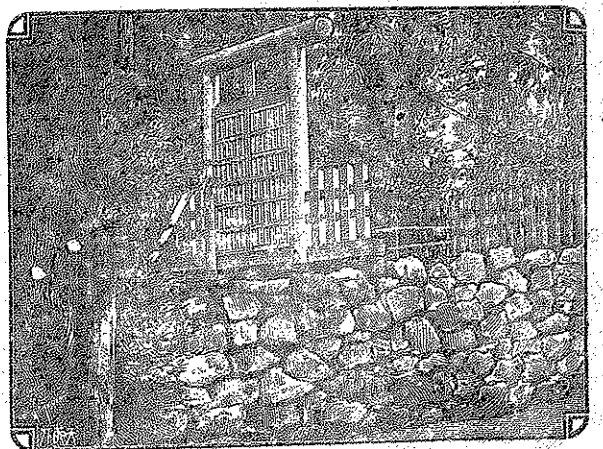
シ、各、ソノ職ニ勉勵スルコトヲ得ルニ至レリ。  
 英艦ノ來寇セシニ當リ、輒クコレヲ擊退ケ、維新  
 ノ際、薩藩ノ、大ニ國事ニ盡スコトヲ得シモノ  
 ハ、上ニ齊彬公ノ明君アリ、下ニ小松帶刀、西郷  
 隆盛、大久保利通等ノ良臣アリシニ由ルト雖、廣  
 郷ガコノ藩政ヲ、整理セシコトナクンバ、或ハ、彼  
 ノ功業ヲ、奏スルコト能ハザリシナラン。

第十七 可愛山陵

高屋山陵

吾平山陵

可愛山陵ハ、薩摩國、高城郡、東水引村ニアリ。皇祖  
 神武天皇ノ御曾祖父ニ當ラ  
 セ給フ、瓊々杵尊ノ山陵ナリ。  
 瓊々杵尊ハ、天照大神ノ御孫  
 ナリ。大神嘗、尊ニ告ゲテ曰ク、豐  
 葦原、中國ハ、我が子孫ノ、世々當  
 ニ君トシ治ムベキ地ナリ。汝、就  
 キテ、コレヲ治メヨ。寶祚ノ隆ナ  
 ルコトハ、天地ト共ニ窮無カルベシ。ト云ハ、八尺瓊  
 勾玉、八咫鏡、叢雲劍ノ神寶ヲ賜ヒテ、コノ鏡ヲ視ル



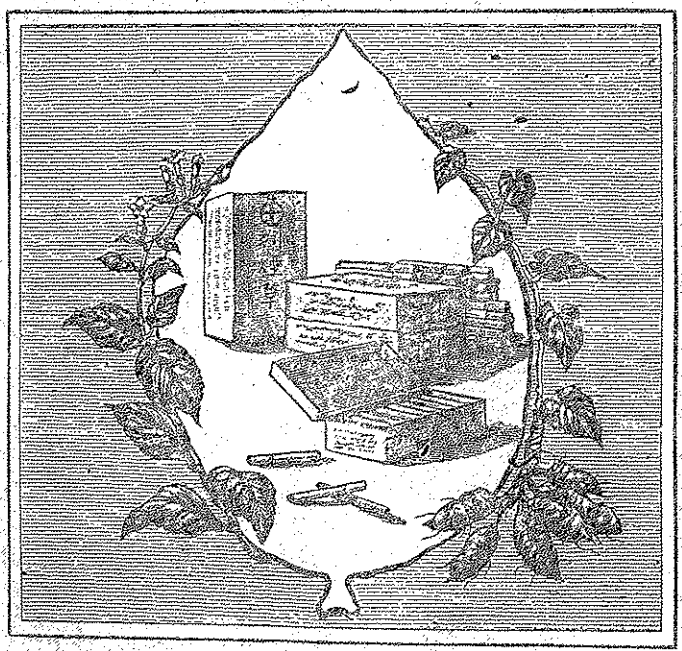
コト、我レヲ視ルガ如ク  
 セヨト勅ラセ給ヒケレ  
 バ、瓊々杵尊、遂ニ日向  
 ノ高千穂、峯ニ宮居ヲ定  
 メ、中國ヲ治メ給ヘリ。ソ  
 ノ後、御子、彦火々出見尊、御  
 孫、鷓鴣草葺不合尊ニ至ル  
 マデ、三世相繼ギテ、此ニ在シ  
 テ、徳化ヲ施シ給ヘリ。神武  
 天皇ハ、即、鷓鴣草葺不合尊

ノ御子ナリ。高屋山陵ハ、彦火々出見尊ノ山陵ニシテ、大隅國、桑原郡、溝邊村ニアリ。又、吾平山陵ハ、大隅國、肝屬郡、蛤良村ニアリテ、鷓鴣草昔不合尊ノ山陵ナリ。

第十八 甘藷及煙草

甘藷ヲ薩摩芋ト稱スルハ、始メテ我が薩摩國ニ播植セシヲ以テナリ。今ヲ距ルコト百九十餘年前、元祿十一年、琉球國王、甘藷一籠ヲ種子島久基ニ贈ル。久基コレヲソノ邑、種子島ニ植エシム。コレヲ我が邦ニテ、甘藷ヲ植ウルノ權與トナス。後、

薩摩、大隅、日向等ノ諸州ニ傳播スト云フ。或ハ言フ薩摩國、揖宿郡、山川村ニ利右衛門ト云フモノアリ。今ヲ距ルコト百八十餘年前、寶永二年、琉球ニ至リ、一甘藷ヲ得、盆栽ニシテ歸リ、コレヲ其地ニ植ウ。コレヲ内地ニ植ウルノ始トナスト。後、享保十七年、我が邦、大二饑工、餓死スルモノ多シ。惟、



薩、隅、日ノ三州ノミ、死スルモノ少シ。コレ實ニ甘  
藷ノ効ニ頼レルモノナリ。徳川吉宗、青木文藏  
ヲシテ、甘藷ヲ栽培スル方法ヲ書キ、ソノ種ヲ頒  
タシメケレバ、大ニ諸國ニ傳播スルニ至レリト  
云フ。

煙草ハ、我が縣、著名ノ物産ニシテ、大隅國ノ國分、  
薩摩國ノ指宿、出水ノ産、最、著ハル。煙草ハ、モト、亞  
米利加洲ノたばこ島ニ産シタルモノナレドモ、  
我が縣ニ於テ、栽培スルモノハ、殊ニ一種ノ風味  
ヲ存セリ。我が縣ノ煙草ハ、何時ニ傳ハリシカ、明

ニ知ルコト能ハザルモ、今、現ニ寛永年間今ヲ距ル  
六十  
年前ノ煙草葉ヲ貯藏スルモノアルヲ以テ、ソノ  
年代ノ久シキコトヲ知ルベシ。或ハ、天文年中、鐵  
砲ト共ニ、種子島ニ傳ハリ、後、薩摩、大隅ニ傳播シ  
テ、今日ノ名産ヲ得ルニ至リシモノナリト云ヘ  
リ。

第十九 我が縣沿革ノ大要

我が鹿兒嶋縣ノ地ハ、宮崎縣ノ地ト共ニ、昔ハ、隼  
人ノ國、又ハ、熊襲ノ國ト稱ヘシガ、第十二代 景  
行天皇ノ時、日向ノ國ト名ヅケ給ヒシヨリ、永ク、

ソノ稱ニ從ヒシガ、後ニ至リテ、薩摩國ヲ置キ、  
元明天皇ノ和銅年中、日向國ヲ割キテ、大隅國ヲ  
置ケリ。種子、屋久ニ島ハ、合セテ別ニ、一國司ヲ  
置キシガ、後、遂ニコレヲ大隅國ニ屬セシメタ  
リ。

源賴朝公、島津忠久公ヲ以テ、薩摩、大隅、日向ノ守  
護トナセシヨリ、子孫ソノ職ヲ世襲セリ。足利氏  
ノ時、大隅ノ豪族、肝屬氏、世々島津氏ト相抗セリ。  
初、平信基ト云フモノ、亦、種子、屋久ニ嶋ヲ領シ、世  
々島津氏ニ隸セズ。島津氏久公ノ時、遂ニコレヲ

降シ、ソノ子元久公ニ至リテ、島津氏ノ勢威、頗振  
フ。是ニ於テ肝屬氏、亦、ソノ麾下ニ屬ス。後、忠昌公  
ノ時ニ至リ、内亂屢起リ、國勢大ニ蹙マル。肝屬氏、  
再、自立シ、日向ノ伊東氏ト相結ビ、勢、漸ク強大ナ  
ルニ至レリ。後、柏原天皇ノ大永年中、島津貴久  
公、封ヲ繼グニ及ビ、故封ヲ復シ、勢威日ニ盛ナリ。  
ソノ子、義久公ニ至リテ、國勢益強ク、遂ニ肝屬氏  
ヲ降シ、伊東氏ヲ逐ヒ、肥前ニ入リテ、龍造寺隆信  
ヲ斬ル。ソノ勢、破竹ノ如シ。遂ニ筑前、筑後ヲ侵シ、  
大友氏ヲ逐ヒテ、豊後ヲ併セ、殆、九州ヲ舉ゲント



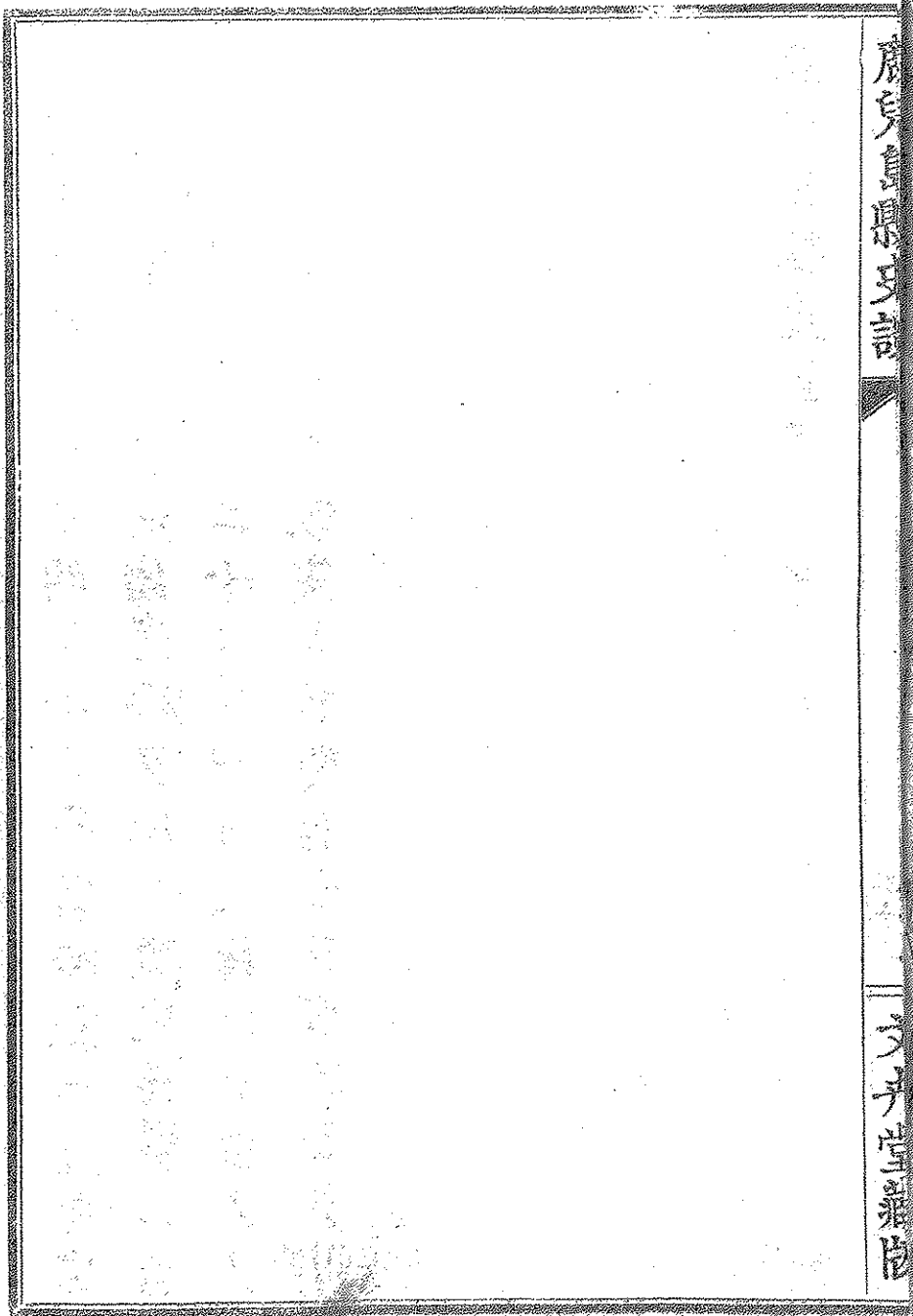
ス。是ニ於テ太閤秀吉、大舉シテ、來伐ツ。義久公、防  
戰利ヲ失ヒ、遂ニ降ヲ納ル。秀吉、因リテ薩隅ノ二  
州及日向ノ諸縣郡ヲ與フ、義弘公ノ子、家久公、琉  
球ノ貢獻ヲ怠レルヲ憤リ、幕府ニ請ヒ、伐チテコ  
レヲ降シ、ソノ大島以下五島ヲ取ル。明治四年、廢  
藩置縣ノ時、鹿兒嶋縣ヲ置キテ、薩摩及大隅ノ熊  
毛、馭謨兩郡ト、大嶋、喜界島、徳ノ島、冲永良部島、與  
論島ヲ管シ、而シテ大島ハ、コレヲ都城縣ニ屬セ  
リ。明治十二年、大島其他ノ各島ヲ以テ、大島郡ト  
ナシ、大隅國ニ屬セラレ。後、大隅、日向ヲ以テ、悉鹿

兒島縣ニ屬セシガ、明治十六年、宮崎縣ヲ置キテ、  
日向ヲ管シ、ソノ南諸縣郡ヲ以テ、鹿兒島縣ニ屬  
セシメタリ。明治二十二年四月、大島郡ヲ除クノ  
外、各郡ノ町村ヲ改定シ、市町村制ヲ實施シタリ。

鹿兒島縣史談

嶋津氏歷代承繼表

代數	御實名	御法名	生	死	年	月	承	繼	年	月	在城地	重要ナル事項
高祖	忠久	得佛	治承三年己亥生	建仁二年壬戌死	三年	六月十八日	文治二年丙午補島津御莊總領(賜島津氏)	出水			入國 居城ヲ本年禮城ニ定ム	
二代	忠時	道佛	建仁二年壬戌生	文永九年壬申四月十日死	九年	四月十日	嘉祿三年繼統	出水				
三代	久經	道忍	嘉祿元年乙酉生	弘安七年甲申四月廿一日死	七年	四月廿一日	文永二年乙丑六月二日承統	出水				
四代	忠宗	道鏡	弘安七年甲申四月廿一日死	建長三年辛亥生	三年	辛亥	弘安七年甲申繼統	出水				
五代	貞久	道鑑	建長三年辛亥生	正治二年己巳生	二年	己巳	文保二年戊午三月十五日承統	出水				
六代	師久	定山	正治二年己巳生	正和二年丙辰三月廿一日死(天曆二年)	二年	丙辰三月廿一日	文和元年二年之際承蓋摩守護職(承平七八年)	出水				
七代	元久	久松	嘉祿元年丁卯閏五月四日死(天曆二年)	嘉祿元年丁卯閏五月四日死(天曆二年)	元年	五月四日	嘉慶元年閏五月繼氏久統	破山			大始良、志希志 鹿兒島	居城ヲ東福寺城ニ定ム
八代	伊久	久松	嘉慶元年丁卯閏五月四日死(天曆二年)	應永十八年辛亥(興國六年)	十八年	辛亥	應永十八年辛亥卯繼元久統	破山			鹿兒島	居城ヲ清水城ニ定ム
九代	忠久	大岳	應永十八年辛亥(興國六年)	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十代	立久	節山	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十一代	忠治	圓窓	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十二代	忠隆	興岳	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十三代	勝久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十四代	貴久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十五代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十六代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十七代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十八代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
十九代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
二十代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿一代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿二代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿三代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿四代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿五代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿六代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿七代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿八代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	
廿九代	義久	大翁	應永三十二年乙巳正月廿一日死	應永三十二年乙巳正月廿一日死	三十二年	乙巳正月廿一日	應永三十二年繼統	鹿兒島			鹿兒島	





賣 捌 所

薩摩郡川内向田町	鹿兒島市中町	日置郡伊集院町	同郡市采湊町	同郡串木野町	南伊佐郡宮ノ城町	同郡山崎村	出水郡阿久根町	給良郡加治木町	同郡同町	同郡蒲生町	東郷郡國分本町	西郷郡岩川五十町	同郡同町	宮崎縣都之城町
吉田支店	谷村藤吉	玉利傳藏	田中與助	折田金次郎	野村ハル	前田榮太郎	北國敬吉	松田藤藏	尚文館	河野喜兵衛	永山仁次郎	深江利助	中山嘉兵衛	高野茂吉
肝屬郡鹿ノ屋町	南大隅郡大根占町	南諸縣郡大崎町	同郡同町	翁山郡谷山町	川邊郡加世田武田	同郡大崎町	給黎郡知賢町	熊毛郡北種子西ノ表	同郡	大島郡名瀬港	同郡同港	同郡古仁屋村	同郡徳ノ島	同郡沖永良部
山之内龍之助	有川熊太郎	山下森太郎	大坪嘉一郎	田原藤八	吉見彦四郎	吉峰菊二	絞島敬助	廣瀨宗義	榎本將彦	勝目三助	平尾榮次郎	黒岩高商店	森新左衛門	有川貞哉

Handwritten red ink characters on the book cover, likely a title or author's name, including characters like 明 (Ming) and 珍 (Zhen).

圖書 和圖書 遡  
a 1380839731 a  
福岡教育大学蔵書